

## 主 題：人はなぜ罪を犯すのか

## 聖書箇所：ローマ人への手紙 5章12－21節

「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」（ローマ3：24）、ひとりの罪人が、主イエス・キリストによって備えられた罪の赦しを信じ受け入れるなら救われると言います。パウロはこの罪が赦され神によって義なる者と宣告されるという信じがたい真理と、その神の恵みのすばらしさをすべての人々に知ってもらいたくて、あらゆる機会を用いて語り続けて来ました。ローマの人々にもそのことを知ってもらうために、まず各個人の罪深さについてパウロは言及して来ました。そして、人間は自分の創造主なる神を愛することも、また、信じて仕えることもせず、却って、神でないものを崇拜し、主なる神が忌み嫌う罪を愛し逆らい続けて来たことを示して来ました。そしてパウロは、イエス・キリストはそのように弱く不敬虔な罪人であり、神の敵であった私たちのために死んでくださったこと、そして、今私たち信仰者は義とされ、神との和解を得た者であることを教えて来ました。パウロはこの主からいただいた祝福を心から喜んでいました。救われたことを心から喜んでいました。罪が赦され、神の前に義とされたことを大いに喜んでいました。信仰者の皆さん、私たちも同じように神の恵みによって救われた者として、神が与えてくださった祝福をしっかりと覚えなければいけません。同時に、私たちはその神が与えてくださっている祝福が、いかに私たちに相応しくないものであるかということ覚えなければいけません。パウロが教えて来たことはそのことです。

私たちはいかに神の恵みを受けるに相応しくない者であるか、どれ程罪に汚れた者か、そのような私たちに神は、当然の報いである神の怒り、神ののろいではなく、神の救いをくださったのです。そのことを正しく理解するなら、私たちは恐らくもっと神を称える者、感謝する者に変えられて行くと思いませんか。なぜ、パウロがあのように生きたのか、すべてを捨てて喜んで主に従い続けて行ったのか、よく分かります。主はこれ程の大きな犠牲と愛をもって私を愛してくれた、私を救ってくれた、そのことを彼自身がよく理解していたからです。神の恵みを正しく理解した人は、それを正しく行ないをもって現わして行きます。神によって多く愛されたことを覚えている者たちは、何とかこの神を愛そうと努力します。パウロはこのローマのまだ会ったことがない人々に、彼らも同じように神を喜ぶ者に、神の祝福を心から感謝する者になってもらいたかったのです。それでこの手紙を記し、そのすばらしさを教えようとするのです。

今日、私たちが見て行くローマ5：12から、最初の接続詞「**そういうわけで**」に目を留めてください。もうすでに私たちが学んで来たように、この5章の1－11節に記されていた神が信仰者に与えてくださったすばらしい祝福、それを受けているのです。私たちは神によって聖い者であると宣告された、神の敵であった私たちが神の子とされた、今はもう私たちは神と和解したと、そのすばらしい恵みを語ってきたパウロは、この12節からこんなにすばらしい祝福をいただいた、だから「**そういうわけで**」と、21節までさらに神の恵みのすばらしさを語り続けて行くのです。ですから、私たちがこのようにテキストを見て行くと、パウロがいかにこの恵みを感謝していたのか、喜んでいたのかがよく分かります。そのことを繰り返して彼は語っているからです。

この12節を見ると、パウロはその恵みのすばらしさを伝えようとしていますが、ただそのすばらしさを語るだけでなく、このすばらしさを罪と比べることによってより明らかにしようとしていることが分かります。神の恵みと人の罪を比較することによって、神の恵みのすばらしさを述べようとするのです。なぜ、パウロはそのようなことをしたのでしょうか？私たちの推測ですが、恐らく、パウロは人々が抱く疑問を想定しながら、この手紙を記していたのでしょうか。なぜなら、パウロは宣教旅行でいろいろな所に出かけて、多くの人々に会って来ました。年齢も様々で、文化も違う、人種も違う、そういう人たちに会って、パウロが彼らにキリストの福音を語ったとき、彼はあることに気付いたからです。人々がもつ共通の疑問に気付くのです。それは多分このような疑問でしょう。「どうしてこのひとりの人の死が、時代を越え、人種を越え、国境を越えて、信じるすべての人に救いを与えることが出来ると言えるのか？」です。なぜ、イエス・キリストの死が、全人類に影響を及ぼす救いをもたらすと言い切れるのかということ。その当時の一部の人に、ということなら分からなくもない、でも、全人類のためにイエスが救いの影響を及ぼすなどとどうして言えるのか？と。恐らく、パウロ自身もそのように考えていたのでしょう。彼が記している所にそのような疑問が見られます。

そして、この疑問は今でもあります。このようなことを問う人たちがいます。例えば、「約二千年前のこのイエスの死が、どうして今の私たちに影響を及ぼすのか私には分からない。二千年前の出来事だし

よう？」と言います。このような疑問を踏まえた上で、パウロはこの12-21節で神の恵みのすばらしさを説明して行こうとするのです。そこでパウロは、ひとりの人の罪が実際に全人類にもたらした影響を引き合いに出して、神であるイエス・キリストの恵み、救いのすばらしさを教えようとするのです。ひとりの人の罪が実際にどのように全人類に影響を及ぼしたのか、そのことを明らかにすることによって、恵みがすべての人々に影響を及ぼしたということを明らかにしようとするのです。この手紙を読んでいると、パウロがこの手紙を記しながら彼自身にいろいろな思いが出て来ていることがよく分かります。ですから、12節で話し始めたことが18節で再び本題に戻って語られています。私たちもそのようなことをよくします。話し始めて途中から別の話になって、最後に初めの話に戻るといふ、そのようなことを私たちはこの手紙の中に見ることができるのです。パウロのことをまた少し身近に感じるような、そのような箇所です。

12-21節に出て来るのは、二人の人物、二つの行ない、二つの結果です。二人の人物とはアダムとイエスです。そして、この二人が何をしたのか、そして、彼らが行なったことがどのような結果をもたらすのか、これらのことがこの12-21節に記されています。パウロはアダムとイエスを比較しているのです。そして、14節の最後に、パウロはアダムに関して「**アダムはきたるべき方のひな型です。**」と語っています。非常に類似点があるということです。

### ☆アダムとイエス・キリストの比較

アダムとイエス、パウロはIコリント15:45で「**聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。**」と語って、アダムを最初のアダムと呼び、イエスを最後のアダムと呼んでいます。このように二人を比較しているのです。「最初のアダムと最後のアダム」、「最初の人アダムは生きた者となった。」…最後のアダムは、生かす御霊となりました。」とはパウロは何を言いたかったのでしょうか？この一つ前の44節を見るとはっきりします。15:44「**血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。**」、ここには二つのからだは述べられていることに気が付きます。「**血肉のからだ**」と「**御霊に属するからだ**」です。簡単に言えば「救われていない者」と「救われている者」のことです。アダムは血肉のからだを次の世代へともたらして行きました。つまり、救われていない人です。アダムから生まれて来る者はみな救われていないのです。ところが、最後のアダムであるイエス・キリストは御霊に属するからだをもたらしたのです。つまり、救われている者、新しく生まれ変わった人たちのことです。アダムから出て来た者はみな、救いを必要とする者です。イエス・キリストによって生まれ変わった者は、救われた御霊を内に宿す者たちです。このような比較をパウロはここでしているのです。

#### 1. 二つの行ないとそれがもたらした結果 5:12-21

さて、この二人が何をしたのか、そして、彼らの行動がどのような結果をもたらしたのか、そのことをごいっしょに見て行きます。

##### 1) アダムの行ない 12-14節

12節から、二人の為したそれぞれの行ないを見て行きますが、14節まで、ここにはアダムの行為と、その行ないがもたらした結果が書かれています。今日、私たちはそのことを見て行きます。12-14節「**そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。:13** というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。:14 ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。**アダムはきたるべき方のひな型です。**」。

##### (1) 罪を犯した

アダムがしたこと、彼の行ないですが、それはひと言で言えば「罪を犯した」ことです。アダムは神が造られた最初の人間です。ゆえに、この罪は「人類最初の罪」と言えます。被造物最初の罪ではありません。アダムが罪を犯す前に被造物である天使が罪を犯しているからです。しかし、人間として最初に罪を犯したのです。15節には「**違反**」ということばが出て来ます。「**ひとりの違反によって**」とアダムがなした行為をパウロはこのように「**違反である**」と語っています。16節には「**一つの違反のために**」とあり、17節「**ひとりの人の違反により**」、18節「**ちょうど一つの違反によって**」、19節には「**ひとりの人の不従順によって**」とあります。ですから、パウロはここでアダムが為したことをこのように教えているのです。アダムがしたことは神に対する違反です。神に従わなかった、神の教えに背いたということです。皆さんもご存じのように、その出来事は創世記の中に記されています。創世記2章に、神はエデンの園にアダムとエバを置かれこのような命令を与えたことが記されています。2:16-17「**神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。:17** しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」」、これが命令です。

そして、アダムはその命令に逆らったのです。この命令に違反したのです。神の命令に従おうとしなかったのです。

## (2) 神が与えた役割を果さなかった

また、彼が犯した罪はもう一つあります。最初にアダムが造られ、そして、アダムの助け手としてエバが造られました。これが創造の目的です。ところが、3章に記されているように、実際に彼らが罪を犯すとき、誘惑を受けたのはエバでした。エバがその実を取って食べて、そして、アダムに渡すのですが、アダムはどこにいたのでしょうか？ 3：6「**そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。**」、つまり、アダムはエバといっしょにいたのです。アダムが犯した罪を見てみましょう。神が男と女を創造されたときそれぞれに役割を与えました。男性は家庭という環境にあっては家族を導くという責任です。本来なら、アダムはエバに対して「それはまちがっている。神のおきてに反することだから止めなさい。」と諭して正しい方向へ導いて行くはずですが、実際に起こったことは、アダムがエバを正しく導かないで、エバがアダムを導くことを容認していることです。神が創造されたその目的、神から与えられたその務めを果さなかったのです。悲しいことに、アダムはこのような罪を犯したのです。そして、私たちが次回学ぶことですが、イエスは何を行なったのか？この18-19に出て来ますが、イエスは義を行ない、イエスは従順でした。アダムと全く正反対のことを行なったことが記されています。

## 2) アダムの行ないがもたらした結果 12-14節

そのような罪を犯したアダムはどのような結果をもたらしたのでしょうか？一つは自分自身にもたらしたものであり、同時に、全人類にもたらしたものの、この二つです。

### (1) アダム自身にもたらしたもの

#### a) 彼が罪人になった

彼自身にもたらしたものの、それは難しくありません。この行為によってアダム自身が罪人となったことです。そして、その結果、彼は罪の影響を受けます。罪の影響とは非常に恐ろしく、その影響を見るとき、それは自分自身の力ではどうすることも出来ないものだということに気付きます。

### ◎罪の影響 — 罪の影響はどのように働くのか

#### (i) 心に影響を与える

その結果、私たち人間は悪いことを考えるようになります。創世記の中で、主なる神がこの世界を滅ぼそうとされたとき、その原因はいったいどこにあったのかが記されています。創世記6：5「**主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。**」、罪がなかった人間が罪を犯すことによってどのようなようになったのでしょうか？次第に悪いことだけを考えるようになって行ったのです。神のことを考えるのではなくて、神のことよりも自分のことを考え、そして、それが神の前に正しくないことであっても、自分のしたいことを実践するようになって行くのです。なぜなら、心にあるものが行動へと移って行くからです。同じように、創世記8：21には「**…人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。…**」と記されています。ですから、罪の影響はまず心に及びます。心が変わられてしまうのです。悲しいことに、心が変わられて行くことによって、それは生き方にまで影響を及ぼして行くのです。

#### (ii) 思考に影響を与える

悲しいことに、私たちは汚れた思いを持つ者へと行って行きます。思考が汚染されてしまうのです。イエスが話されたこと、マタイの福音書5：27-28「**『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたも聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。』**」、つまり、実際に何かの行為を為すだけでない、私たちの思いの中で考えの中で、そのような悪い思いを抱いてしまうということです。汚れた思いをもってしてしまうのです。神はそのようにお造りにならなかった。しかし、罪がそのように私たちの思考にまで悪い影響を与えたのです。罪は思考までも汚染してしまうのです。

#### (iii) 行動に影響を与える

心と関連していますが、罪は行動に影響を及ぼして行きます。創世記3章に三つの行動が記されています。罪がどのように行動に影響を及ぼすのか、罪によって彼らは間違った行ないをしたのです。

(イ) 道徳的に汚れた判断をするようになった＝創世記3：7に「**このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。**」とあります。今までなかったことが起こったのです。彼らは裸だったのです。ところが、彼らが食べてはならない善悪の知識の木の実を取って食べたときに、「**ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。**」のです。つまり、今までとは違った間違った物の見方というも

のを持つようになったということです。悲しいことに、ゆがんだ目で物事を見てしまうのです。今まで彼らが見ていたものはすべて神によって造られたすばらしいものでした。ところが、この罪を起こすことによって、彼らは裸が恥ずかしいと思うようになった、それを隠さなければならないという思いを持ったのです。造られたときはそのような思いは持っていませんでした。すべてを見て、すべてを造られた神を称えていたのです。ところが、罪を犯すことによって、隠さなければいけない、恥ずかしいという、そのような間違った見方をするようになったのです。しかも、神の前にそのままの姿で出るとは相応しくないと考えたのです。ですから、彼らは「いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」のです。このことはもう少し後で学びましょう。

(ロ) 神から隠れようとする＝8－10節「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。：9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」：10「彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」、二つ目に彼らが行なったことは、神から隠れようとすることです。先ほどから見ているように、彼らは明らかに自分たちが神の前に正しくないことを行なったことに気付いているのです。ですから、全く見方が変わっている訳です。これまではすべてのものに対して感謝していた彼らが、そうでない自分があることに気付くのです。間違った見方をするのです。彼らはそれまで喜んで神との交わりを、その時間を持つようとしてそれを楽しんでいました。ところが、彼らが神の声を聞いたとき、彼らはその神から隠れようとするのです。彼らは自分たちのからだをいちじくの葉で覆うとした、それは罪を犯したためにそのようなになったのですが、同時に、彼らは神から隠れようとしたのです。なぜでしょう？罪を犯したからです。確かに、彼らは自分たちが神の前に間違ったことを行なったことに気付いているはずですが、なぜなら、今までと違う自分がそこにいるからです。

では、なぜ彼らは神の前に赦しを求めて出て行かなかったのでしょうか？なぜ、神の前に自分たちの罪を明らかにして、「私は間違っていた、赦してください。あなたに従ってこれまでと同じように歩んで行きたいから祝福をください。」と言わなかったのでしょうか？彼らがしたことは、そのように神の前に正しいことを行なうことよりも、自分でやりたいことやっけて行くという、そのような選択をしたのです。自分たちの判断をもって生きて行こうという選択です。その結果、彼らは神から離れようとしたのです。創造主なる神から離れて自分の好きなように生きて行こう、自分たちの考え、自分たちの判断で生きて行こうして神から隠れたのです。人類の歴史は同じことを繰り返していると思いませんか？人々は光よりもやみを愛するのです。神の方に行こうとしないのです。神を愛して神に従うよりも、私たちは自分の思い通りに生きて行こうとするのです。罪とは、そのように神から隠れよう、神から距離を置こうとして、そのような行動に至らせるように働きをなすのです。

(ハ) 責任のなすり合い＝12－13節にこのようにあります。「人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」：13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」、三つ目に出て来ることは「責任のなすり合い」です。罪を犯したことによって「罪の責任をなすり合う」こと、「あの人が悪い」と言い始めるのです。「この人がこんなことをしたから悪い、私は悪くない。」と、そのように責任をなすり合うのです。これまで神とともに歩み、罪のなかったアダムとエバが、罪を犯すことによってこのような者へと変えられ、このような行動を取るようになった、これが罪の力です。罪がこのように行動に至るまで悪い影響をもたらしたのです。

罪の影響は心に及び、思考に及び、そして、行動に及びます。もう一つ、

#### (iv) 決心にも影響を及ぼす

それは決心、人の決心にまで及びます。ヤコブ4：17に「こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。」とあり、ここでヤコブは神のみこころを知っていながらそれを行わないこと、それを躊躇すること、それは怠慢の罪であると言うのです。正しいことが何であるかを分かっているながらそれをしないこと、それは罪だと。そのようにヤコブは教えたのです。ですから、正しいと分かっているながらそれを選択できない、聖書の言っていることが正しい、神の言われていることは正しいと思うけれど、それを選択できないのです。聖書はそれは罪だと言います。ですから、これまでは神の言われたことにすぐに従っていた人たちが、罪ゆえに、「今しなければいけないのですか？もう少し先でもいいのではないですか？」と、私たちはその決心を躊躇するのです。

このように、罪は人に影響を及ぼします。まさに、私たちはそのような影響を聖書の中に見出すことができます。また、聖書を見なくても、私たち自身がそうであるということは自分を見るならよく分かります。私の心は本当に罪に汚染されたものであり、私たちの思考も汚染されているし、私たちの行動もその通り、そして、私たちは正しいことを為して行くというその決心においても、なかなかそれが出来ない愚かな者なのです。このような罪の影響があります。ですから、アダムが罪を犯すことによって

彼自身が罪人になったと言うのです。

#### b) アダム自身に死を招いた

二つ目に、アダムが罪を犯すことによって自分自身に招いたことは「死」です。アダムは死ぬ者となったのです。創世記2：17に「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」と神が言われたその通り、アダムは死ぬ者となったのです。「死ぬ者となった」というときに、私たちが覚えておかなければいけないことは、死にはいくつかの種類があるということです。

(i) 肉体的死=それまで「死」が存在しなかったアダムとエバに死が訪れるのです。神に逆らうことによって、罪を犯すことによって、その結果、彼らは死を招いてしまったのです。肉体的な死、つまり、肉体と霊魂、物質と非物質の分離を私たちは「肉体的死」と言います。人間が死を迎えた時、物質的な部分である肉体はまだ地上に残ります。でも、その非物質的な部分、霊魂はその信仰に基づいて定められた所に行きます。ですから、そのように分離すること、それが肉体的な死です。創世記の中でこのように言われています。3：19「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」と。ですから、人間は罪ゆえに死ぬ者となったのです。肉体的な死を経験する者となったのです。そして、アダムは肉体的に死にました。

(ii) 霊的な死=霊的に死ぬということです。この霊的な死は生きた神との分離です。アダムは罪を犯したため霊的にも死んだのです。でも、ご存じのように、アダムが木の実を取って食べたその瞬間、彼は肉体的に死ななかつたのですが、これまでもっていた神との関係が完全に崩壊したのです。神と分離してしまったのです。いのちの源である真の神と引き離されたゆえに、彼は霊的に死んだのです。その結果、これまではなすことすべてが神に喜ばれていたのですが、罪を犯したために、神を喜ばせることが出来なくなったのです。それは彼が腐敗した性質をもつ者になったことを示すのです。サタンは蛇を通して誘惑を与えました。「この木の実を取って食べたら、あなたはもっとすばらしい祝福を得る」と。ところが、それは大間違いでした。アダムとエバが失ったものは、今まで楽しんできた神との特別な親しい交わりであり、神の祝福です。彼はこれまでもっていた平安の代わりに、不安と恐れをもらいました。これまでもっていた喜びの代わりに悲しみを身に招きました。そして、祝福の代わりにのろいを自分の生活に招いたのです。霊的に死んだ者、この生きた真の神と引き離されてしまう。ゆえに、この神だけが与えることの出来る祝福もその永遠のいのちも失ってしまったのです。

(iii) 永遠の死=そして、三つ目の死は「永遠の死」です。今日のテキスト、ローマ5：21の最後に「永遠のいのちを得させるためなのです。」と書かれています。イエス・キリストは永遠のいのちを与えてくれます。では、罪がもたらすものは何でしょう？永遠のさばきです。なぜでしょう？今話したように、いのちの源である神から離されたゆえに、この永遠のいのちを失ってしまったのです。ですから、私たちは生まれ変わるまでこの永遠のいのちを自分のものとする事は出来ないのです。永遠のいのちを得ていない人たちは死んだ後どうなるのでしょうか？その人たちは確かに永遠に生きます。この永遠のいのちとはすばらしい祝福です。神とともに永遠を過ごすのです。でも、永遠のいのちを得ていない人たち、すなわち、罪赦されていない人は祝福の中ではなく永遠ののろいの中を生きるのです。なぜなら、彼らは彼ら自身の罪を神が赦すと言っておられるのに、その赦しを拒み続け、救い主を拒んだゆえに、彼らは自分の犯した罪の報いを自分自身の身に招いたからです。それは永遠に終わることのないさばきです。これがアダムが罪を犯すことによって自分自身に招いたものでした。

#### (2) 全人類にもたらしたもの

さて、これからです。アダムの罪が人類にもたらしたもの、全人類に影響を及ぼしたそのことが、実は、この12節から記されています。

##### a) 罪

アダムの罪が人類にもたらしたもの、それは「罪」です。アダムが自分自身に招いたようにアダムの罪は全人類にも罪をもたらしたと言うのです。12節「ちょうどひとりの人によって」、このアダムの罪によって「罪が世界にはいり、」と言っています。この「罪」ということば、この名詞形はここでは複数ではありません。もし複数なら、いろいろな罪、具体的な罪の行為を表わしますが、そうではないのです。ここは単数です。だから、個々の罪ではなく、パウロが言いたかったのはその「罪の性質」です。ですから、アダムの罪が人類にもたらしたものは「罪の性質」なのです。ですから、私たちは人から教えられなくても罪を犯すのです。私たちの心の中には罪の行為を生み出す汚れた性質があるのです。そのことに私たちは気付いているはずですが、アダムの罪が全人類にこのような罪の性質をもたらしたのです。

##### b) 死

二つ目に、アダムの罪によって全人類に死がもたらされたと言います。12節「罪によって死がはいり、

こうして死が全人類に広がったのと同様に、」とあります。「広がった」とは、ちょうどカビが周りにどんどん広がって行くように、一つの罪によって全人類に「死」が広がって行ったと言うのです。ゆえに、人間は生まれながらに肉体的に死ぬ者となりました。そして、霊的に死んでいる者、つまり、神との関係が全くない霊的に死んだ者、生まれながらに永遠にさばかれる者として生まれて来るのです。

ここまで聞いて私たちが思うことは「私が死んだ者として生まれて来ているなら、その責任は私ではなくアダムにあるのではないか？アダムが罪を犯したから私はこのように罪をもった者として生まれて来ている。だから、アダムが悪いのではないか？」ということです。でも、私たちは私たち自身の罪をアダムのせいにして良いのでしょうか？パウロはそれに対してこのような答えを与えています。「それは違う！それは間違っている！」と、12節の後半に「それというのも全人類が罪を犯したからです。」とあります。この「罪を犯した」という動詞の時制は非常におもしろいのです。現在形なら「私たちは罪を犯しているから」という今現在のこととなりますが、ここで使われている時制は「過去」のことです。過去のあるときのことではなく、過去にそういう事実があったということをお伝えしたいのです。つまり、パウロは「全人類、あなたがもうすでに過去において罪を犯した。かつて、罪を犯した。」と言っているのです。では、いったいいつのことでしょうか？パウロが教えているのは「アダムが罪を犯したときにあなたもともに罪を犯した」ということです。だから、私たちはアダムを責めることが出来ないと言うのです。なぜなら、アダムが罪を犯したときに私たちも彼のからだの中にいたからです。聖書のことばを使うなら彼の「腰の中にいたから」です。

そのことを説明している箇所があります。ヘブル7：9－10を見ましょう。「また、いうならば、十分の一を受け取るレビでさえアブラハムを通して十分の一を納めているのです。：10 というのは、メルキゼデクがアブラハムを出迎えたときには、レビはまだ父の腰の中にいたからです。」、7：1から書かれていることは、アブラハムが王たちを打ち破って帰って来たとき、サレムの王であるメルキゼデクが彼を出迎えて祝福したときのことです。このメルキゼデクという人は王であり祭司でもあると書かれていますが、この方のことはよく分からないとあります。アブラハムとこのメルキゼデク、どちらが上であるかよく分かります、メルキゼデクです。だから、彼がアブラハムを祝しています。そして、アブラハムは彼に一番良い戦利品の中から十分の一を彼にささげています。そのことがここに記されているのです。アブラハムが十分の一をメルキゼデクに納めたのですが、ヘブル書の著者は言います。確かに、アブラハムが納めたのですが、同じようにレビも十分の一をこのメルキゼデクに納めたと。

このことは神がどのようにご覧になっているのかを教えているのです。まだレビは生まれてもいません。まだ、レビ族など存在もしていません。でも、アブラハムがその行為をしたときに、アブラハムから生まれて来る子どもたちも同じことをしたと見られるのです。ですから、アダムが罪を犯したときに、私たちはアダムの腰の中にいた、すなわち、アダムから生まれて来ているのです。ですから、神はあなたも私も同じように、同じときに罪を犯したとご覧になっているのです。このことがパウロがこのローマ書5章で教えていることなのです。

神によって直接に創造されたアダムの肉体とその靈魂は、自然繁殖によってその子へと伝えられて行きます。神がアダムをお造りになった、アダムのからだを造り、アダムの靈魂をお造りになった。そして、そのアダムから生まれて来る者たちはアダムの子どものとして、その肉体と靈魂を受け継いで行くと言うのです。使徒17：26には「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とお定めになりました。」とあります。パウロがここで言っていることは、「ひとりの人からすべての人々が生まれて来た、アダムから私たちは生まれた。」ということです。ですから、神がお造りになったアダムのその肉体と靈魂を私たちは受け継いでこの世に生まれて来るのです。

しかし、彼から受け継ぐのはそれだけではありません。私たちは罪の性質も同様に受け継いで生まれて来るのです。今日、私たちが読んだ詩篇51篇のみことばを思い出してください。ダビデはこのように言っています。5節「ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。」と。それがいつそのようになったのでしょうか？「母が私をみごもった」とき、受精したその時に私はもうすでに罪ある者となったと言うのです。聖書ははっきりと受精した時に人は生まれたと教えています。そして、生まれた者にはこのように罪の性質が宿っていると言うのです。ウェストミンスター大教理問答書の中に「原罪は我々の始祖たちからその子孫に自然的生殖によって伝えられるから、その方法によって彼らから生まれて来るすべての者は、罪のうちにみごもり、また、生まれる。」とあります。子どもが生まれて来るその出産を通して、私たちは肉体だけでなく罪をもって生まれて来るのです。ですから、人は親から肉体と靈魂を受け継いで来ますが、同じように、この罪の性質も受け継いで来るのです。

パウロはそのことを12節で話した後、その説明を13－14節に加えています。私たち人間は生まれて来たときに、アダムの子孫としてみなその罪の性質をもっているというその説明を加えるのですが、

なぜ、罪の性質をもっていると言えるのでしょうか？

◎なぜ、罪をもっていると言えるのか？

律法が与えられる前にも世には罪があったとパウロは言いました。13-14節「**というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。：14 ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。**」。確かに、律法が与えられることによって人間は神のおきてに反しているということが分かりました。だから、律法は私たちがどう思うかではなく、神の基準と自らを照らし合わせて、私は神の基準に反している、規格外であるということをも自分自身が悟るためです。しかし、その律法がなくても人間は罪をもつて生まれて来ていると言います。その証拠を14節に見ることができます。「**ところが死は、アダムからモーセまでの間も、**」とここにモーセという名前が出ています。モーセに神は律法が与えられたからです。ですから、神がアダムを造って、そして、モーセを通して律法を与えるまでの間、「この間の人々をよく見てみなさい。みな死を迎えたでしょう。」と言います。人類の歴史において、死を迎えずに天に招かれたのはイエスを除いて二人だけです。イエス・キリストは確かに人間的に死を迎えました。ですから、その二人を除いた人間はみな死んだのです。この死ぬという出来事がある人には罪があったということ、罪があるということを明らかにするのです。

ですから、確かに、律法がなくてもみな死にました。しかし、この事実は彼らは律法をもっていなかったけれども罪をもっていたということを明らかにしていると言うのです。14節に「**アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。**」と書かれています。この箇所をよく見てください。「**同じようには罪を犯さなかった**」けれど、「罪を犯さなかった」とは言っていません。罪を犯したけれど、それはアダムのようにもなかったし、律法をいただいてからの人々と同じではなかったという、それだけのことです。アダムの違反とはアダムが直接神から「これを犯してはならない」と言われたことに背いたことです。律法はどうでしょう？律法はこれを犯してはならないと直接命じています。ですから、彼らはそのように直接神から命じられたその命令、戒めに対して逆らったのです。だから、律法をもらっていない人たち、律法を知らない人たちは、神がこのように命じているということを直接に、実際に目で見ただけではありません。耳で聞いた訳でもありません。でも、彼らは同じようには罪を犯していないけれど罪を犯している、ゆえに、彼らもアダムと律法をもらった人々と同じように死を迎えているということです。だから、罪がなければ、罪を犯していなければ死はないのです。

悲しいことに、人間はすべて罪人であるゆえに、みな生まれながらに死ぬ運命にあるのです。赤ちゃんが生まれて来ましたが、でも、彼らも死にます。なぜでしょう？彼らは罪をもつて生まれて来ているからです。パウロはそのことをここで言っているのです。律法が与えられる前も、アダム以降、アダムが罪を犯したことによって人間はみな罪の性質を持っていると言うのです。しかも同時に、アダムを責めることはできない、みなアダムによって罪を犯した、だから、その責任は一人ひとりが取らなければならないのです。そして、その罪があることは一人ひとりが死ぬというこの現実が明らかにすると言うのです。パウロはこのようにして、この12-14節で、アダムの行なったことが彼自身に、そして、全人類にどのような影響を及ぼしたのか、そのことを教えました。パウロは「**アダムはきたるべき方のひな型です。**」と言いました。アダムがもたらしたものは悲しいことでした。アダムが人類にもたらしたものは大変な悲劇でした。それがイエスの「**ひな型**」であるとはどういうことでしょうか？ひとりの人が人類に影響を及ぼす、一人の救世主が全人類に影響を及ぼす、この点において類似している、「**ひな型**」だと言うのです。でも、感謝なことに、アダムは人類に破滅をもたらしましたが、救い主は信じるすべての人に永遠の祝福をもたらします。そのことをパウロは伝えたいのです。そこで、次に15節から、パウロはアダムとイエスを比較することによって、この罪がどれ程に大きくても、神が下さる恵みはそれよりもはるかに優れているということを教えようとするのです。

最初に私たちが見たように、「**ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。**」と、そのことを教えるのです。私たちの行なったわざではない、私たちが良い人間になったからでもない、ただ、神の一方的な恵みによって、この信じる信仰によって、すべての者はこの祝福にあずかると、そのすばらしさをパウロはこの後教えて行きます。期待をもってみことばを見て行きましょう。